

令和 3 年度 立正大学文学部文学科
日本語日本文学専攻コース
卒業論文発表会資料（白岩広行ゼミ）

身体名詞を含む慣用句とメタファー・メトニミー

色彩と言葉

米津玄師の歌詞表現の特性

感情形容詞の類義語比較

女性語の変化 ―時代別の小説を用いて―

古典落語における噺家の工夫 ―連接母音の長母音化から見る江戸落語の登場人物―

イントネーションにより与えられる音声イメージの比較

フィクション作品におけるキャラクターの話し言葉の研究

小中学生むけ教材における行為要求表現

日本における第二言語教育と習得

ら抜き言葉における言語内的特徴と外的特徴

調味料語彙にみる日本の食文化のあり方 ―「味噌」「塩」「酢」の意味変化をもとに―

日本語の比較 ～誤用分析からみる発生の法則～

※ 目次、主要参考文献の体裁について、白岩の判断で若干の変更を加えた箇所があります

身体名詞を含む慣用句とメタファー・メトニミー

【論文の目次】

第1章：はじめに

第2章：先行研究

2-1 メタファー・メトニミーについて 2-2 慣用句とメタファー・メトニミー

2-3 身体名詞を含む慣用句と関わるメタファー・メトニミー

2-4 身体名詞を含む慣用句と感情 2-5 まとめ

第3章：「頭に来る」「腹が立つ」について考察

3-1 怒りを表す慣用句 3-2 「頭に来る」について

3-3 「腹が立つ」について 3-4 「頭に来る」「腹が立つ」の比較

3-5 「頭に来る」「腹が立つ」の意味分析

第4章：まとめ

第5章：おわりに

【概要】

本論文では、身体名詞を含む慣用句とメタファー・メトニミーの関係について調査した。また、異なる身体名詞を用いながら、類似した意味を持つ慣用句同士の差異を研究することで、慣用句をより正確に使い分けることができると考え、「頭に来る」と「腹が立つ」という二つの慣用句を比較・考察した。

第2章では、身体名詞と関わるメタファー・メトニミーとして、身体を容器に見立てる容器メトニミーについて調査し、「頭」「腹」が容器メトニミーと関わっていること、その内容物として感情が考えられることを確認した。

第3章では、現代日本語書き言葉均衡コーパス・青空文庫を用いて、「頭に来る」「腹が立つ」それぞれと共起する副詞等を調査し、意味の違いを考察した。

その結果「頭に来る」は限度を超えた怒りを表す〈超過性〉、突発的な怒りを表す〈突発性〉を持ち、「腹が立つ」は徐々に増す怒りを表す〈漸次性〉、自身を対象とした怒りを表す〈内省性〉を持つと結論付けた。

【主要参考論文】

石田プリシラ (2003) 「慣用句の意味を分析する方法」『日本語と日本文学』37 13-26 (筑波大学国語国文学会)

田中聡子 (2003) 「心としての身体—慣用表現から見た頭・腹・胸—」『言語文化論集』2 (2) 111-124 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科)

色彩と言葉

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

2.1 基本色名と基本色彩語 2.2 色名と色票から分かるイメージの差異

第3章 色彩語の調査・結果

3.1 調査方法 3.2 調査結果

第4章 まとめ

【概要】

色彩の持つイメージと語句の意味がどのように影響するのか辞書や現代日本語書き言葉均衡コーパス、色彩検定などの書籍を用いて研究した。

基本色名とは色を言葉で表すとき基本となる色の名前のことであり、赤、黄、緑、青、紫、橙、黄緑、青緑、緑青、青紫、赤紫の10色のことである。品川（2020）

基本色彩語は11種の基本カテゴリーが存在し、白、黒、赤色、緑色、黄色、青色、茶色、紫色、ピンク色、オレンジ色、灰色である。バーリン・ケイ（2016）

千原、阪井田（1990）は色名・色票によるイメージ調査を行った。「あかいろ」「みどりいろ」「くろいろ」は色名と色票の尺度の平均評定値が比較的類似しているが、「くさいろ」「ワインいろ」では、色名と色票が、やや異なった結果になった。その原因は、色票による「ワインいろ」とアンケートの回答者による「ワインいろ」と誤差が生じるのは、色そのものよりも事物に引っ張られているのだと述べている。

筆者は色名のイメージと語句の意味がどのように影響するのかを調査した。

赤は強さを表すことから、嘘、他人という単語をさらに強化していると考ええる。青は、熟していない植物の実を青いと表すことから、未熟や若さを表すと考ええる。黄色は明度の高い色であり、「明るい」「活気」「喜び」というイメージのあるため、「黄色い声」という解釈になるのではないかと。白は、何もないという白のイメージが「潔白」という言葉を表している。黒は、全てが覆い隠されて分からないという心理的な意味合いと黒が持つイメージ「悪」と一致している。

最後に、言語学と色彩学は関係性がないように思われるが、色で言葉を表し、また言葉で色を表すように、実は近い関係性であることが分かった。

【主要参考文献】

品川泰一（2020）『生涯学習のユーキャン 色の世界を知る～ベーシック編～』U-CAN

千原孝司、阪井田裕代（1990）「20色の色名・色票によるSD評定値及び連想反応語」『滋賀大学教育学部紀要』40

ブレント・バーリン/ポール・ケイ 日高杏子 訳（2016）『基本の色彩語：普遍性と進化について』一般財団法人 法政大学出版局

米津玄師の歌詞表現の特性

【論文の目次】

序章 研究動機

第一章 先行研究

第一節 GReeeeN の歌詞の表現特性の先行研究

第二節 コブクロの歌詞の表現特性の先行研究

第三節 米津玄師の歌詞の表現特性の先行研究

第二章 研究概要

第一節 研究対象 第一項 米津玄師について 第二項 対象となる楽曲

第二節 研究方法

第三章 楽曲の研究・分析 第一節 全楽曲の分析結果 第二節 人気曲の分析結果

第四章 総括と今後の課題 第一節 総括 第二節 今後の課題

【概要】

現代において流行していると言える米津玄師の歌詞の表現特性の分析及び研究を行った。対象となる楽曲は2012年5月に発売された1st アルバム『diorama』から2021年6月に発売された11th シングル『Pale Blue』までの全89曲である。

高木氏の GReeeeN の歌詞の先行研究を基に、ジャンル、対象、人称、色彩、歌詞のタイプ、主題の捉え方、歌詞内の感情の七つの項目を用いて Excel を使用し分析した。

分析・研究の結果、各項目ごとに様々な特性が判明した。例として、感情の項目では感情の面で米津玄師の楽曲を分析した場合、積極的な曲と消極的な曲の数に大きな差はないことが分かった。また、米津玄師が作詞をするにあたって「愛」の感情に重きを置いているであろうことが分かった。人称の項目では一人称、二人称ともに強く聞こえる印象にあるものはあまり使用されない傾向にあり、一人称は、女性言葉と言えるようなものも存在することが分かった。また、人気曲の分析の結果、主題の捉え方は前向きであるものが七割であることから、積極的な考え方や、思想が人気となる傾向があり、ジャンルとして見比べたとき、「恋愛」ジャンルが多く、「恋愛」ジャンルで多く用いられる対象「好きな人」も同時に多く見られることが分かった。

今後の課題の一つとして、分析した項目の結果を他の分析した項目と関連付けて、関係があるのかどうかを視認できるようにすることが挙げられる。

【主要参考文献】

・片山秋作(2012)『コブクロの歌詞の表現特性』大阪教育大学教育学部卒業論文

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kokugo/nonami/2010soturon/katayam.htm>

・高木秀(2019)『GReeeeN の歌詞における表現特性』大阪教育大学教育学部卒業論文

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kokugo/nonami/2018soturon/2019takagi.pdf>

・波多野完治(1949)『文章心理学』新潮社

感情形容詞の類義語比較

【論文の目次】

第1章 はじめに

1.1 本稿の目的 1.2 本稿の構成

第2章 先行研究

2.1 『現代形容詞用法辞典』

2.2 加藤恵梨 (2012) 「「かなしい」と「つらい」の意味について」

2.3 村上佳恵 (2013) 「感情形容詞の使用実態：属性形容詞との対比を通して」

第3章 意味分析

3.1 検証概要 3.2 検証方法 3.3 辞書の選定について

3.4 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』について

3.5.1 「つらい【辛い】」 3.5.2 「くるしい【苦しい】」

3.5.3 「きつい」 3.5.4 「しんどい」 3.6 検証結果

第4章 比較分析

4.1 検証概要 4.2 筆者の内省による分析 4.3.1 感情を抱く主体 4.3.2 感情の意味特徴

4.4 コーパスによる分析

第5章 まとめ

【概要】

本論文では、「つらい」「苦しい」「きつい」「しんどい」の意味を精査し、共通点・相違点を明らかにすることを目指した。これらの4表現はいずれも苦痛などを表す感情形容詞である。先行研究をまとめ、国語辞典の記述と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の用例を用いて意味を精査した。それらを踏まえ、筆者の内省に基づき作例を挙げ、コーパスを用いながら意味を比較した。

考察の結果、4表現はいずれも精神的・肉体的な意味で問題なく使用できることがわかり、「感情の主体の状態だけでなく、対象の状態も表すことを志向する」性質を持つ感情形容詞の中にも、より感情の主体の状態を表す語、より対象の状態を表す語が存在することが同時に明らかとなった。また『現代形容詞用法辞典』では見られないとされていた、「身体の一部を特定した表現」を確認することができた。

【主要参考文献】

加藤恵梨 (2012) 「「かなしい」と「つらい」の意味について」コーパス日本語学ワークショップ第1回発表資料、pp.43-52

村上佳恵 (2013) 「感情形容詞の使用実態：属性形容詞との対比を通して」『学習院大学国語国文学会誌』56

〈辞書〉

飛田良文・浅田秀子『現代形容詞用法辞典』(1991) 東京堂出版

女性語の変化 —時代別の小説を用いて—

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究のまとめ

1節 女性語とは 2節 歴史 3節 衰退 4節 女性語の印象 5節 文末表現の分類

第3章 小説を用いた女性発話の文末詞の調査

1節 調査内容・方法 2節 取り扱う小説について 3節 調査結果

3-1節 平成時代の小説 3-2節 昭和時代の小説 3-3節 明治時代の小説

第4章 女性語文末詞の使用率の変化

第5章 女性語が男性語ないし中性語を使うことが増えているのか

第6章 おわりに

【概要】

近年の調査では女性語は衰退傾向にあると言われている。また、女性が男性語・中性語を使うことが増えているという見解があり、その調査と女性語減少の変化についてを、時代別の小説を用いて行った。使用した小説は、二葉亭四迷『浮雲』（第1篇）1887年・太宰治『斜陽』1947年・尾形真理子『試着室で思い出したら、本気の恋だと思う』2010年である。

セリフの文末詞を分類し比べた結果、女性語文末詞の使用率が減ったと確認できたのは「わ」「ね(名詞)」「のね」「なの」「かしら」「の」だった。また、やや減少していたのは「わよ」「のよ」だった。女性発話のセリフで男性語の使用が増えているのかについて、使用が増えているという見解の確認はできなかった。むしろ、女性語が一般化されていなかったと推測される1887年のほうが、男性性よりの文末詞の使用率は高いという結果だった。中性語の使用が増えているのかについて、どの年代でも使用はされていたが、2010年での使用率が高かった。女性が中性語を使うことが増えたという見解を確認することができた。

【主要参考文献】

有泉優里(2013)「会話文末における「男ことば」と「女ことば」の分類：ジェンダー識別傾向とジェンダー特異性を指標として」『日本語とジェンダー』13、日本語ジェンダー学会 学会誌編集委員会編

ルート・ヴァンバーレン(2001)「小説に使用される性差マーカー」(Sex Markers in Japanese Novels)『筑波応用言語学研究』8、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース

古典落語における噺家の工夫
— 接続母音の長母音化から見る江戸落語の登場人物 —

【論文の目次】

- 第1章 はじめに
- 第2章 先行研究のまとめ
- 第3章 調査方法
- 第4章 調査対象
 - 4-1 「大工調べ」と調査対象の登場人物
 - 4-2 調査対象資料の噺家
- 第5章 品詞別にみる接続母音の長母音化
 - 5-1 全体
 - 5-2 名詞
 - 5-3 代名詞
 - 5-4 動詞
 - 5-5 感動詞
 - 5-6 形容詞
 - 5-7 形容詞(ない)
 - 5-8 形容動詞
 - 5-9 助詞
 - 5-10 助動詞
 - 5-11 打消し助動詞
 - 5-12 その他
- 第6章 終わりに

【概要】

古典落語は同じ内容の噺でも噺家によってそれぞれ違った印象を聞き手に与える。また、古典落語は登場人物の名前がその登場人物のキャラクター性を表し、且つ同じ名前を持った登場人物が複数の古典落語作品に登場するという稀有な芸能でもある。そこで、本稿では接続母音の長母音化から古典落語「大工調べ」における登場人物のキャラクター性、それに対する噺家の工夫を調査した。

調査方法は調査対象である4人の噺家の「大工調べ」における政五郎、与太郎、大家の3人の登場人物たちの台詞の接続母音と接続母音が長母音化したものの用例を採集し、言語内的観点と言語外的観点から比較するものである。

調査の結果、全体的に大工である政五郎、与太郎に比べて大家の接続母音の長母音化率が低いことが分かった。また、他の噺家に比べて、助詞の接続母音において志ん朝の長母音化率が低かったことや助動詞の接続母音において談志の長母音化率が低かったことなど、噺家による差異もいくつか確認できた。しかしながら、噺家による差異は一部に留まっており、登場人物の社会的立場やキャラクター性が長母音化率に強く影響していることが考えられる結果となった。

【主要参考文献】

- 古今亭志ん朝 京須 偕充・編(2004)『志ん朝の落語 6 騒動勃発』ちくま文庫
- 立川談志(2011)『談志の落語 9』静山社文庫
- 柳家小さん著 飯島友治編集(1990)『古典落語 小さん集』ちくま文庫
- 柳家小三治(2017)『柳家小三治の落語 7』小学館文庫

イントネーションにより与えられる音声イメージの比較

【論文の目次】

- 第1章 はじめに
 - 1-2 研究の目的
- 第2章 アクセント イントネーションなどの概要
 - 2-3 イントネーションが発展した時代
 - 2-4 イントネーション、アクセントの教育
- 第3章 キャラクター音声のステレオタイプ性
 - 3-2 パラ言語
 - 3-3 声優のキャラクター演技音声を用いた音声知覚
- 第4章 調査方法
- 第5章 調査結果
- 第6章 おわりに
- 第7章 参考文献

【概要】

声優の交替による「表現方法」の変化が及ぼすキャラクターのイメージの変化について着目し、キャラクターの持つイメージやそれを視聴する側の持つ感情には「音声」が大きく関わってくるのではないかと仮説を立てた。調査では「Voice Recorder」と「Praat」を使用し、「声優交代が起きている作品」を条件に音声データを調査することで、視聴者がキャラクターに対して持つイメージの変化を考察した。『北斗の拳』のケンシロウの台詞「おまえはもうしんでいる」のセリフで調査した結果、この台詞を発した声優は四人で、ケンシロウ役の声優全員のイントネーションが下降調で暗く冷たい雰囲気を持つことが共通であるが、アクセントの変動がそれぞれ異なること、台詞が持つイメージは力強く感じられる物、弱々しく感じられるもの、淡々と述べられているものなど様々であったことから、これこそが声優の交替におけるキャラクターイメージの変化であると考えられた。キャラクターの持つ雰囲気自体が大きく変わることはないが、アクセントの変動による違いが台詞のイメージを変え、キャラクターのイメージに多少の変化を生み出していると考察し、キャラクターのイメージ、視聴者の感情は「音声」と関係があるという仮説が成立するという結論に至った。

【主要参考文献】

- ・前川喜久雄(2006)「イントネーション研究発展の要因」『音声研究』第10巻第3号、pp.7-17
- ・石井沙季・伊藤克且(2019)「キャラクター音声のステレオタイプ識別のための音響分析」『情報処理学会第81回全国大会講演論文集』、pp.695-696
- ・林大輔(2019)「声優のキャラクター演技音声を用いた音声知覚に関する実験研究」『愛知淑徳大学論集—人間情報学部篇』第9号、pp.49-62

フィクション作品におけるキャラクターの話し言葉の研究

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

2-1 先行研究の性格推定実験 2-2 役割語と属性表現 2-3 ヒーロー語としての非標準語

2-4 形態素解析について 2-5 人称詞と文末詞 2-6 男性語と女性語 2-7 性格表現用語について 2-8 性格表現用語とビッグ・ファイブについて

第3章 調査

3-1 調査方法 3-2 調査結果 3-3 比較と考察

第4章 結論

第5章 参考文献

【概要】

これまで多くの小説や漫画などを読んできた中で、登場人物のキャラクター性を印象付けるのは話し方によるものが大きいと感じていた。本研究では、形態素解析をもちいて、キャラクターの性格と話し言葉に関連性があるのかを調査する。

性格心理学のビッグ・ファイブを参考に、①明るい性格②内向的な性格③行動的な性格④落ち着きのある性格⑤親切的な性格⑥わがままな性格⑦掴みどころのない性格 の 7 つの性格を設定し、アンケートでそれぞれ当てはまると思うキャラクターを回答してもらった。アンケート回答から、セリフが少なすぎるキャラクターを除外し、相手が存在する対話に限定してセリフの収集を行った。回答数の偏りから男性キャラクターのみを比較対象とし、収集したセリフの形態素解析を行い、人称詞、会話文末、話し言葉における語彙変化を中心に比較を行った。

結果、男性語の使用率や一人称語彙の使用比率、会話文末から、筆者の予想していたよりも大きな差はなかったが、ある程度の傾向に違いを見つけることができた。

アンケート内容、心理学や情報学の知識の必要性、調査対象が限られるなど、反省点の多く残る調査となってしまったが、「文字として表現された話し言葉」の比較としては、筆者の満足のいく研究ができたと思う。

【主要参考文献】

青木孝悦(1971)「性格表現用語の心理-事典的研究—455 語の選択, 分類および望ましさの評定—」『心理学研究』第42巻第1号、1-13

金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

田中翔一・山本博史(2016)「フィクション上のキャラクターに関する性格推定」『情報処理学会関西支部支部大会講演論文集 2016』

小中学生むけ教材における行為要求表現

【論文の目次】

- 1.はじめに
- 2.先行研究の整理
 - 2-1.森(2013) 2-2.蒲谷・川口・坂本(1994) 2-3.姫野(1997)
 - 2-4.高梨(2011)と熊井(2012)の段階的分類 2-5.金(2016)の受益者についての考察
 - 2-6.小中学生むけ教材における行為者・決定権者・受益者に関する考察
- 3.調査対象教材について
 - 3-1.調査対象教材と教材選定基準 3-2.調査対象教材の編集方針 3-3.調査方法
- 4.調査結果
 - 4-1.学年ごとの比較 4-2.問題の形式ごとの使用状況
 - 4-3.過去形の疑問文「～でしたか、～ましたか」に使用される疑問詞の調査
- 5.総括
〈参考文献〉

【概要】

話し手が聞き手に対し何らかの行為を行うように求める表現は、「行為要求表現」などと呼ばれ、多くの研究がされている。ただし、そのほとんどは、特定の相手に対する会話や手紙などの日常的な場面での使用の場合に限られている。実際には、教科書や問題集などの設問文の中でも使用されているが、それらの行為要求表現について詳しく調査した論文は多くない。

本研究では小中学生むけの教材の設問文に使用されている「行為要求表現」について調査し、その表現が使用されている意図や、使用による効果について研究する。その結果をもとに、行為要求表現への理解、現在の国語教育への理解を深め、生徒の学力や学習意欲を向上させることのできるより良い国語教育や授業、教材についての考察も行った。

調査の結果、設問文の行為要求表現は学年や問題の形式、内容ごとに使い分けられていることがわかった。その理由として、小学生は家族や学校などといった身近なコミュニティーの間で使用される言葉や文を理解し、使用できるようになることを、中学生は「社会」というより広い範囲に存在する人との間で使用される言葉や文を理解し、使用できるようになることを目的としているからであると考える。

【主要参考文献】

- 金玉英(2016)「現代日本語行為要求表現の分類の検討」『異文化.論文編』17、法政大学国際文化学部
- 姫野伴子(1997)「行為指示型発話の機能と形式」『埼玉大学紀要』33(1)、埼玉大学教養学部

日本における第二言語教育と習得

【論文の目次】

第1章 序論

第2章 日本の英語教育の変遷と課題

2.1 教育指針の変遷 2.2 現代日本人の英語力

第3章 言語習得とは

3.1 言語習得のメカニズム 3.2 母語との関連性

第4章 日本における第二言語習得を実現するために

4.2 インプットとアウトプット 4.3 教室や自主学習の役割 4.4 意識的な学習が習得面で担う要素 4.5 第二言語学習における動機づけの重要性

第5章 結論

【概要】

本研究では、第二言語の習得、及びその教育について考察する。その際に日本で最も身近であり世界的公用語である英語を例として、議論を進める。

日本は世界的に見ても英語習得を苦手としている国であるが、それは英語と日本語の「言語間の距離」が大きく影響している。英語学習の中でも特に発音や語彙の解釈など会話領域の習熟は難しいとされており、それを問題視した近年の日本政府は「実用的なコミュニケーション重視」の英語習得を目標として掲げ、「英語の授業は全て英語で行う」。「コミュニケーション英語」カリキュラムの導入など様々な政策を講じている。

3章では言語習得のメカニズムについて述べている。言語習得とは、「正しい〇〇語を覚えていく」のではなく、自分の中に新しい言語体系を作り、それを修正しながら目標言語体系に近づいていくことで習得されていく。目標言語に到達するまでのプロセスである学習者の言語体系のことを「中間言語」と呼ぶ。中間言語は目標言語だけでなく母語知識の影響も大きいことが明らかになっており（転移）、母語知識が良い影響を齎すこともあれば、悪い影響（負の転移）を齎すこともある。典型的な負の転移として、日本語を母語とする学習者は英語を学習する際に「R」と「L」、「B」と「V」を区別して発音することが困難であるとされるが、これは日本語の母語知識が負の転移として顕現した例と言える。

言語習得には「気づき」という概念が重要である。転移から生じたギャップなどを発見し、修正する機能のことを指すこの概念は中間言語構築の際極めて有用であり、この「気づき」を促進するにはアウトプット学習が非常に効果的である。

【主要参考文献】

白井泰弘（2008）『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』岩波書店

鳥飼玖美子（2018）『英語教育の危機』筑摩書房

長沼君主（2003）「言語学習における社会的文脈と動機づけ」『心理学評論』46(1)

ら抜き言葉における言語内的特徴と外的特徴

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究の調査

2.1 「ら抜き言葉」の言語内的特徴 2.2 「ら抜き言葉」の言語外的特徴

2.3 「可能動詞」の発生・変化の過程 2.4 「ら抜き言葉」の発生・変化の過程

2.5 「れ足す言葉」「れれる言葉」について 2.6 「ら入れ言葉」について

2.7 「ら抜き言葉」と方言の関係

2.8 「ら抜き言葉」における学校教育とその影響

第3章 各種「コーパス」を用いた「ら抜き言葉」における言語内的特徴調査・考察

3.1 「話し言葉」における「ら抜き言葉」の言語内的特徴調査

3.2 「書き言葉」における「ら抜き言葉」の言語内的特徴調査

3.3 「話し言葉」から「書き言葉」への言語変化の過程考察

第4章 まとめ

【概要】

一般的に「誤用」と評される「ら抜き言葉」はカジュアルな「話し言葉」から発生し、フォーマルな「書き言葉」へと推移していくという仮説を前提とし、推移の過程について調査を進めた。調査にあたっては「各種コーパス」を使用し、先行研究を基に「肯定形と否定形における使用率」「音節数の大小」「上一段動詞と下一段動詞における使用率」などを比較し調査することで、「話し言葉」から「書き言葉」への変化を考察した。

調査を進めた結果、「書き言葉」から「話し言葉」への推移には一定の特徴が見られた。

「肯定形と否定形」では、「肯定形」が話し言葉に多く、「否定形」が書き言葉に多く見られたため、「否定形」から「書き言葉」に流入したと考えた。また「音節数の大小」に関しては、「音節数の少ない」ものから変化しやすいという従来の言語変化の特徴の通り「音節数が少ない」ものから「書き言葉」に流入していたことがわかったが、「一音節語、二音節語」の使用割合に差がなかったことから、「音節数の少ない」ものの中でも「一音節語・二音節語」は同時期に「書き言葉」へ流入したと考察した。しかし、「上一段動詞と下一段動詞」については使用率に差が見られなかった。

以上のことから、「ら抜き言葉」における「話し言葉」から「書き言葉」への推移は、「否定形」の「一音節語・二音節語」から始まったと結論付けた。

【主要参考文献】

佐野真一郎 (2009) 「現代日本語のヴォイスにおける進行中の言語変化に関する数量的研究:

「ら抜き言葉」, 「さ入れ言葉」, 「れ足す言葉」を例として」『Sophia linguistica』57

辛 昭静 (2002) 「ら抜き言葉」の研究概観『言語文化と日本語教育 増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線』2002 年号、日本言語文化学会

調味料語彙にみる日本の食文化のあり方
—「味噌」「塩」「酢」の意味変化をもとに—

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

2.1 調味料の歴史 2.2 調味料語彙について 2.3 慣用句・ことわざについて

第3章 味噌

3.1 辞書における意味 3.2 慣用句・ことわざの分類 3.3 コーパスでの用例 3.4 生じた意味変化と味噌のあり方・国民性について 3.5「脳味噌」と「味噌」の関係

第4章 塩

4.1 辞書における意味 4.2 慣用句・ことわざの分類 4.3 コーパスでの用例 4.4 生じた意味変化と塩のあり方・国民性について 4.5「塩対応」について

第5章 酢

5.1 辞書における意味 5.2 慣用句・ことわざの分類 5.3 コーパスでの用例 5.4 生じた意味変化と酢のあり方・国民性について 5.5「塩梅」について

第6章 おわりに

【概要】

本論文では、伝統的な調味料でもある「味噌」「塩」「酢」を対象とし、それぞれの調味料語彙における慣用句・ことわざを中心に、生じた意味変化や食文化のあり方、国民性について歴史や用例とともに考える。第2章の先行研究では、調味料および本稿で対象とする味噌、塩、酢の歴史、調味料語彙の種類や使用頻度を調査・分析した先行研究、慣用句・ことわざの辞書における意味と、ことわざ研究の概要を挙げる。

各調味料語彙において「味噌」には批判的な意味、「塩」には経験に関する句を中心に辛さ・苦しさ、吉凶といった意味、「酢」には怒りや戒めといった意味が生じていた。生じた意味の要因については、味覚や効能、信仰面や認知の問題などが関係していると考えた。

生じた意味や慣用句・ことわざの使用に相違点がみられた一方で、江戸時代には食文化が大きく発展したことによって日本語学や日本文学にも影響を与え、様々な価値観や人間性を創り上げてきたと考えた。

【主要参考文献】

- 穴田義孝(1981)「ことわざにみる国民性—社会的性格の研究(Ⅱ)—」『札幌大学教養部札幌大学女子短期大学部紀要.A』18(A)p69-94 札幌大学教養部
- 吉田優子・池添博彦(1992)「新聞に認められる食物語彙について 第3報」『帯広大谷短期大学紀要』29(0)p55-88 帯広大谷短期大学

「日本語の比較～誤用分析から見る誤用発生の論理～」

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究を踏まえて

2.1 誤用の要因 2.2 誤用の種類

第3章 調査の初期構想

第4章 調査開始までの過程と変遷

4.1 解釈表明 4.2 定義付け 4.3 調査開始前の考察と総括

第5章 調査結果

5.1 「メール / メール」 5.2 「おごなり」と「なおざり」 5.3 「二つ上の先輩 / 二個上の先輩」 5.4 「きもい / きしょい / うざい」 5.5 「こんにちは / こんにちは」 5.6 「やむをえない / やむおえない」 5.7 「わたし的にはOKです」 5.8 「いう / ゆう」 5.9 「的を射る / 的を得る」 5.10 「ふいんき / ふんいき」

第6章 総括

【概要】

私は、日本語における誤用発生の論理についての調査・研究を行った。分類のための定義付けに始まり、調査の方向性に振れが発生しないよう、主観としての意見の反映と、文献から得た情報の双方を調和させ織り交ぜながら、調査・研究を進めた。

誤用発生の原因を大きく以下の 5 属性に定義付けをした。「(1)時間的属性」「(2)要因的属性」「(3)用法的属性」「(4)環境的属性」「(5)その他」である。これらの誤用としての性質を解説し、第5章となる調査結果で、調査対象として選定をした語の分類分けと、誤用がどのようにして発生しているかの調査を行った。

調査開始以前は、見積もりが甘く「おおよそ特定の属性に偏るだろう」と考えていたが、調査・研究を行うとそのようなことはなく 5 属性にまんべんなくカテゴライズされた。これにより、特定の原因が誤用発生の根底にあるという捕捉には及ばず、選定をした語の誤用としての性質の解説・分類分けの範疇を調査として超えることは終始困難であった。

総じて、調査の対象となる語の数が膨大となる調査であることから、前述の誤用発生の原因となる 5 属性の詳細を緻密に設定し、より機械的に多くの語の分類分けを行うことで有効な調査結果が浮上してくるのではないかと考える。

【主要参考文献】

北原保雄 (2004) 『問題な日本語』 大修館書店

飯間浩明 (2019) 『つまずきやすい日本語』 NHK 出版

松田明子 (1993) 「ことわざ・慣用句における誤用の考察」『国文研究』38、熊本女子大学
国文談話会